

ほうとく 「冒涇する者たちへ」

マルコの福音書 3:20～30

はじめに

今日の箇所は、イエシュアとその働きに対して「悪霊につかれておかしくなっている」と言って批判する者たちの姿が描かれ、そしてそれに対するイエシュアの反論と、罪に関するある重要なメッセージが記されています。しかしやはり本当に重要なのは、そこに秘められた神のご計画についての情報です。内容と語られているメッセージにも目を留めつつ、今日も神のご計画とその完成である「神の国」を思いめぐらす時となりますように。

1. 家

【新改訳 2017】マルコの福音書

3:20 さて、イエスは家に戻られた。すると群衆が再び集まって来たので、イエスと弟子たちは食事を
する暇もなかった。

まずこのような状況説明から記されています。イエシュアの御言葉を聞きに、また病や悪霊に悩まされていた大勢の者たちが、癒しと解放を求めてイエシュアがおられた家に集まって来たのでしょう。イエシュアはもちろんのこと、弟子たちもその対応に追われ、「食事をする暇もなかった」ほどに忙しい様子がうかがえます。しかしヘブル語の視点でこの状況を捉えるならば、ここには「神の国」についての一つのメッセージが「型」として表されていると考えることができます。

まず「イエスは家に戻られた」とありますが、どこの誰の家であるとも記されていません。イエシュアが戻られる家とは何でしょう。家はヘブル語でバイト(בַּיִת)と言い、本来は創世記 6:14 に記されたノアの箱舟の中に造られた「部屋」を意味する言葉です。全世界を水没させ、地上のすべての生命を滅ぼした大洪水、この滅びを免れたのは、バイト「部屋」に入ったものたちだけでした。ですからバイトとは本来、救いを意味し、イエシュアが戻られた「家」と、そしてそこに「群衆が再び集まって来た」という様子は、イエシュアによって救われることすなわちイエシュアとともに「神の国」入り、そこに住まうために集められる人々を指し示していると考えられます。ちなみにこの「群衆が再び集まって来た」という箇所使われている「集まる」という意味の動詞アースフ(אָסַף)もまたノアの箱舟の中に入られることを最初の言及とする言葉です(創世記 6:21)。

そしてイエシュアと弟子たちが「食事をする暇もなかった」という記述についてですが、ここには「食事」を意味するヘブル語のレヘム(לֶחֶם)という名詞が使われており、この言葉は本来、人が神の命令に背いて罪を犯したために受ける労苦を指し示した言葉です。

【新改訳 2017】創世記

3:17 また、人に言われた。「あなたが妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、大地は、あなたのゆえにのろわれる。あなたは一生の間、苦しんでそこから食を得ることになる。

3:18 大地は、あなたに対して茨とあざみを生えさせ、あなたは野の草を食べる。

3:19 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついにはその大地に帰る。

ここで「顔に汗を流して糧を得」という箇所には聖書で最初のレヘムがあります。このように、レヘムとは本来、罪のゆえに受ける呪い、苦しみを指し示した言葉であると言えます。ちなみにこのレヘムの動詞形、ラーハム(רָחַם)はなんと「戦う」という意味でその最初の言及から、国に敵対して出て行く(出エジプト記 1:10) という行為を指し示した言葉であると言え、すなわち「食事をする暇もなかった」とは、レヘムおよびラーハムの持つ本来の意味が生じないということ、つまり「神の国には罪ののろいも苦しみもない、神に敵対して出て行くこともない、ということが表されていると考えられます。このように、一見ただの状況説明のように見える記述も、ヘブル語の視点で捉えるならばそれは神のご計画を指し示す福音、良き知らせとなるのです。

2. 呼び寄せる

【新改訳 2017】マルコの福音書

3:21 これを聞いて、イエスの身内の者たちはイエスを連れ戻しに出かけた。人々が「イエスはおかしくなった」と言っていたからである。

3:22 また、エルサレムから下って来た律法学者たちも、「彼はベルゼブルにつかれている」とか、「悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出している」と言っていた。

この二節はイエシュアとその働きに対し、「イエスはおかしくなった」「彼はベルゼブルにつかれている」「悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出している」などと言う、イエシュアに対する批判、誹謗中傷の激しさを強調したパラレリズム、同じ意味の内容を言葉や表現を変えて繰り返すことで強調している記述であると考えられます。つまりイエシュアに対する誹謗中傷をした「人々」およびそれを聞いて信じた「イエスの身内の者たち」も、「エルサレムから下って来た律法学者たち」も異なる存在ではあっても、イエシュアについての誤った偽りの情報を信じた者としては同じ立場をとった同様の存在であるということです。しかし、そんな彼らをイエシュアは断罪し、拒絶するのではなく、かえってこれを呼び寄せられ、語りかけられたことが次に記されています。

【新改訳 2017】マルコの福音書

3:23 そこでイエスは彼らと呼ばせて、たとえで語られた。「どうしてサタンがサタンを追い出せるのですか。

イエシュアはご自分を批判していた「彼ら呼び寄せ」たことが記されています。しかしなんとここに使われている「呼ぶ」という意味の動詞カーラー(קָרָא)は本来、神が天地創造の初めに、光を呼び出されこれを昼と名づけられた出来事を指し示す言葉なのです。

【新改訳 2017】創世記

1:3 神は仰せられた。「光、あれ。」すると光があった。

1:4 神は光を良しと見られた。神は光と闇を分けられた。

1:5 神は光を昼と名づけ、闇を夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。

「神は光を昼と名づけ」ここに聖書で最初のカーラーがあります。このようにカーラーとは本来、神に「良しと見られ」る存在、そして「光と闇を分けられた」ように、神のものとして選び分けられた、聖別された存在を指し示す言葉であると考えられます。ですからイエシュアはご自分を誤解し、拒絶する者たちをカーラーすなわち聖別して神のものとするということが表されており、イスラエルの民、ユダヤ人たちがこれにたとえられた存在であると考えられます。彼らに対する神の選びは、彼らの父祖アブラハムと交わされた約束(創世記 12:1~3)のゆえに、決して変わらないことが「イエスは彼ら呼び寄せて」という行為の中には表されており、それはたとえイスラエルの民自体が神に逆らったとしても取り消されるものではないことがここに表されていると考えられます。

またイエシュアは彼らに「たとえて語られた」ともありますが、これもヘブル語で見ると、イスラエルの民への祝福を指し示す言葉であることがわかります。ここにはマーシャル(מַרְשָׁל)という名詞が使われており、その最初の言及は民数記 23:7 です。

【新改訳 2017】民数記

23:7 バラムは彼の詩のことばを口にして言った。「バラクは、アラムから、モアブの王は、東の山々から私を連れて来た。『来て、私のためにヤコブをのろえ。来て、イスラエルを責めよ』と。

23:8 私はどうして呪いをかけられるだろうか。神が呪いをかけない者に。私はどうして責めることができるだろうか。【主】が責めない者を。

23:9 岩山の頂から私はこれを見、丘の上から私はこれを見つめる。見よ、この民はひとり離れて住み、自分を国々と同じだと見なさない。

23:10 だれがヤコブのちりを数え、イスラエルの四分の一さえ数えられるだろうか。私が心の直ぐな人たちの死を遂げますように。私の最期が彼らと同じようになりますように。」

23:11 バラクはバラムに言った。「あなたは私に何ということをしたのですか。私の敵に呪いをかけてもらうためにあなたを連れて来たのに、今、あなたはただ祝福だけです。」

これは占い師バラムが語った「詩のことば」で、これが聖書で最初のマーシャルです。バラムはモアブの王からイスラエルの民を呪うように命じられますが、かえってこのマーシャルによって彼らを「祝福した」ことが記されています。ですからマーシャルとは本来、イスラエルへの呪いが祝福に変

わる、神が呪いを祝福に変えられることを指し示した言葉であると考えられ、それはつまり偶像礼拝の罪に陥り、イエシュアを十字架にかけて殺し、**呪われた民となった彼らイスラエルが、やがてそのイエシュアによって呼び集められ、祝福された民、神の選びの民へと変えられる**という神のご計画、約束がこの「**イエスは彼ら呼び寄せて、たとえて語られた。**」という出来事には表されていると考えられます。

3. 敵

【新改訳 2017】 マルコの福音書

3:23 …「どうしてサタンがサタンを追い出せるのですか。

3:24 もし国が内部で分裂したら、その国は立ち行きません。

3:25 もし家が内部で分裂したら、その家は立ち行きません。

3:26 もし、サタンが自らに敵対して立ち、分裂したら、立ち行かずに滅んでしまいます。

ご自分を悪霊呼ばわりする者たちに対してのイエシュアの反論が記されています。まず律法学者たちは「悪霊のかしら、ベルゼブル」という名を用いましたが、イエシュアはこれを「サタン」と言い換えておられます。なぜならベルゼブル(בְּעֶלְזְבוּל)という名は「主人、支配者」の意味を持つバアル(בַּעַל)と「高き(天の)住まい」という意味のゼヴール(זְבוּל)が合わさった言葉で「天の住まいの支配者」という意味だからです。イエシュアにとってそれはご自分の父である神だけであり、決して悪霊どもを指し示す言葉などではないからです。悪霊は神のご計画を阻もうとする敵以外の何ものでもありません。ですからイエシュアはヘブル語で「敵」という意味のサタン(שָׂטָן)という言葉を用いてこれを言い換えられたのだと考えられます。

そしてイエシュアは「**サタンがサタンを追い出**」すことはできないとし、さらに「**分裂したら…立ち行きません**」という表現で、ご自分の働きが悪霊によるものではないことを三度も否定しておられます。ここにもパラレリズムによる強調が見られ、律法学者たちに対して強く反論して、これを全否定しておられる様子がうかがえます。と同時にイエシュアはご自分の働き、目的が「**その国**」また「**その家**」を立ち行かなくする、すなわち滅ぼすことではないことも述べておられると考えられます。なぜならサタンの目的は悪霊を支配することではなく、人を支配することにあり、「**その国**」また「**その家**」とはサタンに支配された人々を指すと考えられるからです。そしてそれはイスラエルの民、ユダヤ人を指すと考えられ、イエシュアの目的はこの民を滅ぼすことではなく、サタンの支配から彼らを奪い返すことであることが次の節に示されていると考えられるからです。

【新改訳 2017】 マルコの福音書

3:27 まず強い者を縛り上げなければ、だれも、強い者の家に入って、家財を略奪することはできません。縛り上げれば、その家を略奪できます。

ここでイエシュアはサタンを「強い者」と言い換え、これを「縛り上げ」と述べておられると考えられます。イエシュアはサタンを単に追い出すのではなく、殺すのでもなく、「縛り上げ」と述べておられます。ヨハネの黙示録にもこう記されています。

【新改訳 2017】ヨハネの黙示録

20:1 また私は、御使いが底知れぬ所の鍵と大きな鎖を手にして、天から下って来るのを見た。
20:2 彼は、竜、すなわち、悪魔でありサタンである古い蛇を捕らえて、これを千年の間縛り、
20:3 千年が終わるまで、これ以上諸国の民を惑わすことのないように、底知れぬ所に投げ込んで鍵をかけ、その上に封印をした。その後、竜はしばらくの間、解き放たれることになる。

このように、神のご計画はサタンを「縛り上げ」、そしてご自分の選びの民であるイスラエルとそれに連なる異邦人たちをサタンの支配から解放し、ご自分の所有の民として奪い返すことにあり、それが「家財を略奪する」また「その家を略奪できます」という記述に繰り返して強調され、表されていると考えられます。

4. 定め

【新改訳 2017】マルコの福音書

3:28 まことに、あなたがたに言います。人の子らは、どんな罪も赦していただけます。また、どれほど神を冒^{まが}洗^{せん}することを言っても、赦していただけます。
3:29 しかし聖霊を冒洗する者は、だれも永遠に赦されず、永遠の罪に定められます。」

そしてイエシュアはここでご自分の働きが悪霊によるものではなく、「聖霊」によるものであることを強調しておられると思われます。そしてここでの内容を整理しておきますと、これは「人の子ら」と「聖霊を冒洗する者」という二つの存在についての言及であると考えられ、まず「人の子らは、どんな罪も赦していただけます」ということです。それがたとえ「神を冒^{まが}洗^{せん}することを言っても」です。しかし一方、「聖霊を冒洗する者は、だれも永遠に赦されず、永遠の罪に定められます」ということです。「神を冒洗する」ことも、この「聖霊を冒洗する」ことも意味としては同じ罪であると言えます。ですから「どんな罪も赦していただ

【新改訳 2017】ローマ人への手紙

8:29 神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです。それは、多くの兄弟たちの中で御子が長子となるためです。

8:30 神は、あらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちはさらに栄光をお与えになりました。

【新改訳 2017】エペソ人への手紙

1:4 すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方にあって私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。

1:5 神は、みこころの良しとするところにしたがって、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。

1:11 またキリストにあって、私たちは御国を受け継ぐ者となりました。すべてをみこころによる計画のままに行う方の目的にしたがい、あらかじめそのように定められていたのです。

このように、神のご計画はすべて「あらかじめ定められた」ものであり、救われる者も、そしてそうでない者、すなわち滅びる者もすべて神の御心によってすでに決定しているということです。

イエシュアは「聖霊を冒流する者は、だれも永遠に赦されず、永遠の罪に定められます。」と言われました。ということは逆を言えば「聖霊」を尊ぶ者、これに聞き従う者は「永遠の」救いが「定められます。」ということです。では「聖霊」とは一体何でしょうか。これをヘブル語の視点で考えるならば、これを意味するルーアハ(רוּחַ)の最初の言及である、創世記 1:2 に目を留める必要があります。

【新改訳 2017】創世記

1:1 はじめに神が天と地を創造された。

1:2 地は茫漠として何もなく、闇が大水の面の上にあり、神の霊がその水の面を動いていた。

天地創造の初め、光さえもまだなかった頃、すでに「神の霊」ルーアハは存在していました。つまり永遠の昔から「動いていた」生きていた存在、それがルーアハ「聖霊」です。つまりルーアハとは本来、天地創造の初め、まさに世界の基が据えられる前を指し示す存在であり、「聖霊を冒流する者」とは永遠の昔、すべての初めからそのような者すなわち神を「冒流する者」、聞き従わない、滅びるべき者として「あらかじめ定められていた」者のことであると言えます。

5. 冒流する

【新改訳 2017】マルコの福音書

3:30 このように言われたのは、彼らが、「イエスは汚れた霊につかれています」と言っていたからである。

また「聖霊を冒流する者」とは、「イエスは汚れた霊につかれています」と言ってイエシュアを神の御子メシアとして認めない、信じない、受け入れない者のことでもあることが記されています。ここでこの

「冒洗する」という言葉の意味について触れておきたいと思います。ヘブル語のガーダフ(גַּדַּף)という動詞がそれで、最初の言及は民数記 15:30 です。

【新改訳 2017】民数記

15:28 祭司は、気づかずに罪に陥ってしまった者のために、【主】の前で宥^{なだ}めを行う。彼のために宥めを行い、その人は赦される。

15:29 イスラエルの子らのうちのこの国に生まれた者でも、あなたがたの間に寄留している者でも、気づかずに罪を行ってしまった者には、あなたがたと同一のおしえが適用されなければならない。

15:30 この国に生まれた者でも、寄留者でも、故意に違反する者は【主】を冒洗する者であり、その人は自分の民の間から断ち切られる。

これは神がモーセを通してイスラエルの民に与えられた律法の一部ですが、ここでは「気づかずに罪に陥ってしまった者」と、そして「故意に違反する者」についての言及がなされ、ここに聖書で最初のガーダフがあります。このようにガーダフとは本来、「故意に違反する者」のことであり、「その人は自分の民の間から断ち切られる」、イスラエルの民の中から追い出されることが命じられています。イエシュアはご自分が十字架にかかれた際、この律法にしたがってこのように言われました。

【新改訳 2017】ルカの福音書

23:34 そのとき、イエスはこう言われた。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」

イエシュアはご自分を十字架にかけた人々は「自分が何をしているのかが分かっていない」、つまりガーダフ「故意に違反する者」ではないと言われました。つまりこの罪はイエシュアの十字架の死という宥^{なだ}めの供え物によって赦されるということです。イスラエルの民、ユダヤ人たちは「イエスは汚れた霊につかれています」と言って神を、聖霊を、そしてイエシュアを冒洗しましたが、イエシュアは彼らを「故意に違反する者」すなわち「永遠の罪に定められ」る者とは見なさず、ご自身という宥めによって罪が赦される者とされました。それは彼らが「どれほど神を冒洗^{ほつよく}することを言っても、赦していただけ」る「人の子ら」であり、天地創造の初め、地の基の据えられる前から、神の選びの民として「あらかじめ定められた」者たちであったからです。ですから、今日の箇所もまた、イスラエルの民、ユダヤ人がいかに神に選ばれているかということが指し示されており、その御心、ご計画の絶対性、揺るがないものであることが表されていると考えられます。ですからイエシュアはご自分に対して「汚れた霊につかれています」、「おかしくなった」、「悪霊どものかしら、ベルゼブルにつかれています」などと誹謗中傷されようとも、怒ることも悲しむこともなく、かえってその「冒洗する者」たちを呼び寄せ、祝福をもって語りかけられたのだと考えられます。イエシュアが、すなわち神が目を留めておられるもの、それは人の罪でも悪霊でもなく、ただ天地創造の初めから御心によってあらかじめ選んでおられた者たちだけなのです。その事実が、今日の箇所に記されたイエシュアの言動には表されていると考えられます。